ちょっと拝見 275

京都府・市立福知山市民病院

〒620-8505　京都府福知山市厚中町231番地
http://www.fukuchiyama-hosp.jp

- ●院　長：香川惠造
- ●設　立：1993年
- ●病床数：354床
- ●診療科：内科、精神科、神経内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、形成外科、心臓血管外科、小児外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、病理診断科、救急科

京都府北部の地域医療を担う基幹病院

広がる診療圏で増える患者

近畿地方以外の人で、京都府の形と地図上の位置関係を正確に語ることができる人は、そう多くはあるまい。地図を改めて見てみると、たしかに京都府は北西の日本海に面する丹後半島から斜めに南東の京都市を経て、さらに奈良県境にまで細長く延びていて、京都府全体を簡単に説明できるものではない。京都からJR山陰本線または大阪からJR福知山線でそれぞれ1.5時間ほどの福知山市もまた、京都府北部の中心都市でありながら、その位置を説明するのはなかなか難しい。むしろ兵庫県の丹波地区の北側に位置する町と説明する方が分かりやすいかもしれない。

その福知山市の市立福知山市民病院（香川惠造院長・354床）は、地域医療を担う中核病院として明治時代に創設された陸軍衛戍病院が前身で、昭和20年（1945）に国立福知山病院として発足、平成5年（1993）に国立福知山病院の経営移譲を受けて、市立福知山市民病院として開設に至った。

そのまま伝統を引き継ぐ形で、当初、18科の専門診療科、300床でスタートしたが、現在は23科を標榜し、354床を有する三次救急を担う地域中核病院である。同院の場合、この診療圏に当たる地域というのはかなり広い。基本的には同院の医療人口は10万人（内、福知山市は8万人）としているが、福知山市はもちろん、隣の綾部市、北部の舞鶴市、京丹後市、宮津市、与謝野町などからの患者の受け入れが目立っている。さらに、福知山市に隣接する兵庫県の丹波市、朝来（あさご）市、さらに篠山市、養父（やぶ）市などにも診療圏を広げている。

京都府の地理的事情と同院の立地からすれば当然の状況ということになるだろうが、基本方針のトップに謳う「福知山地域における基幹的総合病院を目指します」ということからすれば、その目標はすでに達成しているようにも思える。

同院の外来患者は1日平均1,013.4人、入院患者は1日平均316.9人、手術件数は年間3,694件、一般の平均在院日数は12.6日（数値はすべて平成27年）となっていて、外来、入院、手術についてはここ数年、いずれも漸増傾向にある。

救命救急センターの機能と役割

同院に対する広域の診療圏からの期待値はこれを

超えて大きく、これまでに病院の規模以上の機能強化を図ってきた。さまざまな指定医療機関となっていることは当然で、平成25年（2013）4月には病院機能評価（Ver.6）認定も更新している。

またその前年（2012）3月には、これもまた「救急医療体制を充実し、いつでも安心して受けられる医療を提供します」という基本方針を実現する形で、京都府初の地域救命救急センターに指定された。

これを受けて、平成26年（2014）9月、院内に4階建ての救命救急棟を完成させた。これによって365日24時間体制で、以前にも増して、生命の危機を伴う重症患者のスピーディーで専門的な救急処置を提供できることになった。全ての診療科でオンコール体制をとり、緊急手術、緊急内視鏡検査、緊急心臓カテーテル検査および経皮的冠動脈インターベンション、血栓溶解療法（t-PA治療）などの緊急を要する処置にも対応している。

まさに名実ともに京都府北部地域における三次救急医療の拠点が完成したということで、地域住民のみならず、診療圏における病院、診療所などの拠りどころとなっている。一方で、ドクターヘリの受け入れ病院としての役割も果たしている。兵庫県（公立豊岡病院、兵庫県立加古川医療センター）および大阪府（大阪大学医学部附属病院）からも患者を受け入れていて、京都府北部だけでなく、北近畿の救命救急の一翼を担っている。

1階は救急外来対応で、初療室（3室）があり、救急搬入された患者および重症患者を同時に3人まで対処できる広いスペースを確保している。診察室は感染症に対応できる専用空調を備えた診察室を含め5室が設置されている。また、点滴、処置後の経過観察をするベッドを備えた回復室では、患者の血圧、脈拍などの生体情報をセントラルモニターによって確認できるようになっている。

2階は透析室だ。開放的で明るく広い空間には、安心して治療を受けられる50床のベッドスペースが確保されているが、現在は36床が稼働している。そのうち、空気の強制排気装置を設けた感染症患者対応の個室（3室）と、重症者対応の個室（2室）が設けられている。このフロアを全て俯瞰できる位置にスタッフルームおよびスタッフステーションがあって監視体制も万全だ。また、患者の透析前後の一時休憩や食事をすることができる休憩室も別にあって好評だ。

3階が救命救急病棟で、ICU（5床）、CCU（2

明るく広いロビーでは、福知山の風物（由良川、花火大会、桔梗、福知山踊り、福知山城とさつき、うぐいす）を装飾したステンドグラスが来院者を出迎える。

ロビー中央の2階リハビリ室への専用エレベーター。由良川を表現したブルーのステンドグラスに心癒される。

院内コンサート

救命救急センター

平成26年度からオープン

ドクターヘリ　基地は豊岡市にあり、京都では一番多く受け入れている。

3F　救命救急病棟（集中治療室）

集中治療室　中央のスタッフステーションから全体を見ることができる。

ICU

2F　透析室

透析室　現在は1日約46人の患者が治療を受けている。

重症者対応の個室

1F　救急外来

初療室

回復室

床)、PICU（1床)、SCU（1床)、さらに熱傷治療室（1床)、水治療室が設けられている。ここもまた患者の状態が確認できるよう、スタッフステーションは中央に配置し、見通しの良い空間にしているが、ベッドサイドモニター（生体監視モニター）で患者の生体情報も確認できるようにしている点も特徴だ。

救命救急センターの診療実績も年々上昇していて、患者数は年間18,567人、救急車搬入台数は2,863台、入院数2,495人、応需率98.2％となっている（数値はいずれも平成26年度)。こうした実績の背景には、北川昌洋（よしひろ）センター長他、3名の救急専門医の奮闘に加えて、福知山市消防との連携、中丹メディカルコントロール協議会への医師の派遣、救急救命士の教育や事後研修などの日頃の地道な活動があるということを忘れてはなるまい。

また、同院は平成19年（2007）1月に地域がん診療連携拠点病院に指定され、「がん治療など高度な医療を推進する」ことを基本方針で謳い、この面でも地域医療の中心的役割を果たしている。ちなみにがん登録数も増え続けていて、現在、年間857人（平成26年度）におよぶ。部位別件数では、胃、前立腺、乳房が上位3位を占めている。この分野では早くからリニアックを導入し、放射線治療に取り組むなど、常に先端を走り続けてきた。

大江分院の開設でさらに躍進

同院は、期待の大きい地域基幹病院として、こうした救命救急医療や高度医療への対応は今

手術室　手術数の増加に対応し、7室に増室した。

外来待合ロビー

病室

リハビリ室

地域医療連携室

スタッフステーション

レストラン　窓が広範囲に作られ、陽の光があふれている。

ふれあいギャラリー　中央には元市長寄贈のグランドピアノがある。

エレベーターを待つ間でも腰を掛けることができる患者に優しい椅子

病児保育所　平成18年に24時間の保育所がオープン。病後児保育は平成16年7月より。病児保育は平成27年9月より。女性が働きやすい環境に。

研修医の基本的診療能力評価試験（2016年2月施行）では、研修医1年目で全国12位（231病院中）、2年目は8位（273病院中）

後も引き続き機能強化を進める一方で、医療と介護の一体改革の進行に伴って地域包括ケアシステムの構築が進む中、「地域の医療・保健・福祉機関と連携を深め、地域医療の向上を目指す」ことも表明している。

この活動の中心となるのは、地域の病院、診療所などの医療機関との連携、保健、福祉機関との連携に関する“交通整理”の役割を担う地域医療連携室だ。地域医療推進に当たって基軸になる病診連携については、同院の登録医証を持つ約80の診療所と共同の診察カードを使うことで医療の効率化を目指しており、今後さらにこれを拡大する意向だ。

香川院長は地域包括ケアシステムの構築に当たって、こうした病院機能の充実を図っていくことの必要性を認めた上で「医療と行政組織の緊密な連携がますます必要になってきます。そのために福知山市と十分に協議しながらこの分野での行政組織をリフレッシュすることに取り組んでいるところです」と語る。そして、「地域住民の医療に対する意識改革が必要です」とも語り、最終的には医療を享受する地域住民の医療参加の必要性を強調する。健全な地域医療を構築していく上で最も難しい部分だが、要諦には違いない。

その糸口の一つとして、同院ではフィールド医学の拠点を目指すという試みを始めている。例えば所作が複雑な「福知山踊り」の活用だ。いわばご当地の盆踊りなのだが、認知機能に対する踊りの効果をみるため、大学の神経内科と踊りの前後のデータを共同解析し、エビデンスの構築を図る予定である。このような実証的な臨床研究を、川島篤（あつし）研修研究センター長・和田幹生（みきお）地域医療研修センター長が中心となって他にも企画しており、市全体の健康増進運動につなげればと思っている。

ところで、「時代の変化に対応し、患者さま本位の医療を実践する」に当たり、昨年4月、長年にわたって経営赤字が続き、マンパワー不足や施設の老朽化などで十分な医療機能が発揮できなかった市内の国保新大江病院を大江分院（崎長靖生分院長・72床）として開院した。人材を本院から送り、施設改修や医療体制の整備を進める一方、総合診療医をはじめ慢性期を担う看護師など新たな人材育成と訪問診療、在宅医療の推進を二本柱として運営し、「健康満“福”都市・福知山を目指して～大江でのフィールド医学実践をベースに～」と謳い、地域医療の新しいモデル病院を目指している。本院との機能がうまく並び立てば、まさに新しい地域医療モデルの完成も現実的だ。

「快適な環境の創造と経営安定に努めます」という基本方針の下、「この病院でなければならない存在意義が集約された信頼される病院の構築には、荀子の栄辱編の中にある“先義後利”（先に義を成し 後に利を得る者は栄える）の教えをかみしめて取り組むことが必要だと思っています」と香川院長は語るが、同院は、今はまさに「義を成す」時期だが、存在意義が集約された信頼という「利を得る」のは存外、早いかもしれない。